

第5章の注

注1 MacLaury(1987, 1995a, b)によると、実際は色彩語に関しても、名指した(名付けた)色と、色彩語による実際の色の振り分けが一致しないことが指摘されている。つまり、ある色見本が、ある色彩語で名指しされても、その色彩語が、そのある色見本を含むように振り分けられるとは限らず、逆にある色彩語によって振り分けられた色見本が、必ずしもその色彩語で名指しされるとは限らない、ということである。テイラー(1995)によれば、このような意義論的な観点と名義論的観点との組み合わせについて体系的に研究された領域の一つがこの色彩語に関する研究であるという。また、この他にも、意義論的観点と名義論的観点が必ずしも一致しない、互いの鏡像ではないことは、Geeraerts他(1994)のオランダ語の雑誌に使われた衣類用語に関する研究でも指摘されているという。

注2 方言についてはすでに、イメージや意識の問題が井上(2001)などにより実証的に扱われている。また井上(2002, p.78-79)によれば、NHKの県民性調査をもとに方言イメージの区画地図も提示され得るという。さらに、井上(2002, p.79)によれば、方言イメージが非言語的なステレオタイプによって形成されるとともに、言語的理由によっても形成されることが指摘されている。

現在は、完全に方言だけで生活するという事は少なくなった。方言と地域共通語やより東京語に近い共通語など、様々な使い分けがなされている。方言での談話が日本語全体の「話調」の一つであると考えれば、イメージや意識の問題が「話調」研究にも不可避の問題であることは明らかだが、方言にとどまらず、日本語全体についてのイメージや意識の問題についても実証的に明らかにされるべきだと考える。

注3 単一的な日本文化論や日本人論が伝播していくのに、日本語教育も貢献しているということが、杉本(1996)により指摘されている。「日本語」の教育という過程では、ステレオタイプに基づいた「正しい名刺の出し方」、「正しいおじぎの仕方」、「正しい女性的話し方」などの教育を通じ、単一の規範が叩き込まれ、「日本人」や「日本的」なものの内容がゆがめられがちだという杉本(1996, p.26-27)の指摘は、社会言語学はもちろん、日本語学全体の問題としても熟考しなければならないだろう。

また「国語」としての日本語そのものに対してイ(1996)は、社会思想史的に近代日本の言語意識を鋭く分析し、安田(1999)は「方言」についての知識社会的に分析から「国語」である日本語の持つ政治性を見出したが、このような「日本語」そのものの扱い方、「日本語論」学的なアプローチは、たとえ「社会言語学」や「日本語学」が最終的には「言語」の学ではあったとしても、言語をより深く理解するには必要かつ不可欠な視座だろう。